

# 「幕末・明治維新期の取手」

平成21年2月16日(月)から4月19日(日)まで  
 午前10時から午後4時30分まで(入館は4時まで)  
 3月7・28日、4月11日は、午後6時まで(入館は5時30分まで)

会期中無休／入館無料

## 名譽新談

宮和田勇太郎

生國ハ常陸國取手郡本陣ハ  
 何某ハ長男ナリ幼年ヨリ  
 武術ヲ好ミ深ク諸國ヲ  
 馳騁シテ文武ノ垣ハ西京ニ在リ  
 身浮浪ノ輩ナリトアリ  
 勤王ノ赤心ヨリ同志ノ人教名  
 と相慕フ洛陽等持院ニ安置  
 する足利氏ニ持の木像をまつ  
 四條河原より集首あり種々乃  
 罪状と書載したるをあるひく  
 人の知るさらわれず猶そしんを  
 樹山大人のおんち 近世史畧ハ  
 上の巻文久三年の條あり

松林伯山記



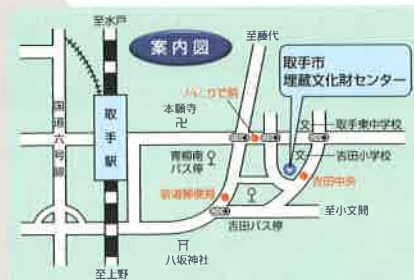
宮和田勇太郎胤影(宮和田保氏所蔵)



土方歳三(所蔵・提供 土方歳三資料館)



魁塚(波谷経重氏所蔵、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館)



### 交通

取手駅東口から大根根交通バスで吉田下車、または関東鉄道バスの龍ヶ崎駅、光風台行きで青柳南下車、藤代・光風台方面からは関東鉄道バスの取手駅東口行きで青柳南下車、いずれからも徒歩約10分  
 コミュニティバス小堀循環ルート新道郵便局下車徒歩約10分、中央循環ルート吉田中央下車徒歩約5分、東南部ルートJAとりで前下車徒歩約8分  
 駐車場あり

※赤字はコミュニティバス停

取手市埋蔵文化財センター  
 〒302-0007 取手市吉田383  
 TEL0297(73)2010/FAX0297(73)5003  
 maibun@city.toride.ibaraki.jp

## 開催にあたって

幕末・明治維新期の激動の時代、取手ゆかりの人物で、歴史の転換期に深くかかわった人物が二人いました。

その一人は、宮和田勇太郎胤影です。胤影は、宮和田村で代々名主と本陣を勤めていた宮和田家の出身でした。文久3年（1863）2月、胤影は同志とともに、京都等持院に安置されていた足利三代将軍（尊氏・義詮・義満）の木像の首を三条河原にさらしました。これは、尊王攘夷運動が尊王倒幕運動へと転換する契機となった事件でした。

もう一人は、相楽総三です。総三は、栲木新田の小島家の出身で、生まれたのは江戸の屋敷とされています。薩摩藩の西郷隆盛や大久保利通の知遇を得て、草莽の志士として倒幕派の関東かく乱作戦を担い、後に赤報隊を組織して年貢半減を触れながら東山道を江戸に進撃しました。しかし偽官軍の汚名を着せられ、下諏訪の地で斬首されました。まさに、明治維新の闇というべき出来事でした。

今回の企画展では、幕末・明治維新期の取手の歴史を概観すると共に、先の二人の他にも、尊王倒幕の志士から若森県権知事・新治県権令となった池田徳太郎種徳、相楽の同志としてともに下諏訪の刑場で露と消えた渋谷総司、幕臣として箱館五稜郭まで戦い抜き、茨城県令となった人見勝太郎寧、地元出身では利根運河開削の功労者広瀬誠一郎を取り上げます。激動の時代の中、私たちの先祖がどのように道を切り開いていったか、その歩みの一端を紹介できればと考えています。

最後になりましたが、今回の企画展の開催にあたりご協力をたまわりました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成21年2月

取手市埋蔵文化財センター

### 講演会

「取手市域の草莽剣客 宮和田又左衛門光胤」

講師:宮地正人氏（東京大学名誉教授、元東京大学史料編纂所長、元国立歴史民俗博物館長）

日時:3月7日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

### 公開講演会（取手市郷土史研究会と共催）

「相楽総三と赤報隊の同志たち ―取手と周辺地域の足跡を追う―」

講師:西澤朱実氏（歴史研究家、新人物往来社第14回郷土史研究優秀賞受賞、主著『相楽総三・赤報隊史料集』）

日時:3月28日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

### 歴史講座

「土方歳三 取手を通る ―慶応四年四月の取手―」

講師:センター職員

日時:4月11日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

各講演会、歴史講座とも会場は福祉交流センター（市役所敷地内）多目的ホール、定員は160人（当日受付順）

### 展示説明

2月28日、3月1・14・15・29日、4月12日:午後2時から

3月7・28日、4月11日:午前11時から 予約不要、当日展示室においでください。

## 例言

1. このパンフレットは、平成21年2月16日から4月19日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第25回企画展「幕末・明治維新期の取手」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。

池田稔、岡田慎太郎、木村廉、齋藤一彦、渋谷経重、染野修、高橋敏、立野晃、永井博、根本彰、野口幸子、人見寧則、広瀬篤、広瀬実、宮和田保、故渡辺博

茨城県立図書館、茨城県立歴史館、鎌ヶ谷市郷土資料館、牛久市立中央図書館、群馬県立歴史博物館、下諏訪町立諏訪湖博物館、諏訪教育会、土方歳三資料館、中央公論新社、土浦市立図書館、東京大学史料編纂所、如意輪寺、松戸市戸定歴史館、横浜開港資料館、流通経済大学図書館、龍ヶ崎市歴史民俗資料館

# I 取手の幕末・明治維新

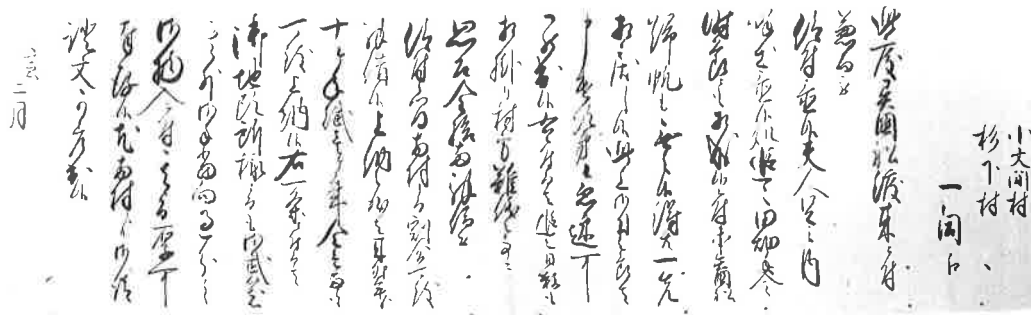
## 1. ペリーの来航と開国

嘉永6年（1853）6月、アメリカ東インド艦隊司令長官のペリーは、アメリカ大統領フィルモアの国書を携えて浦賀（横須賀市）に来航し、日本に開国を迫りました。鎖国を祖法としていた幕府は、とりあえず国書を受け取り、翌年に返事をする旨を伝えます。

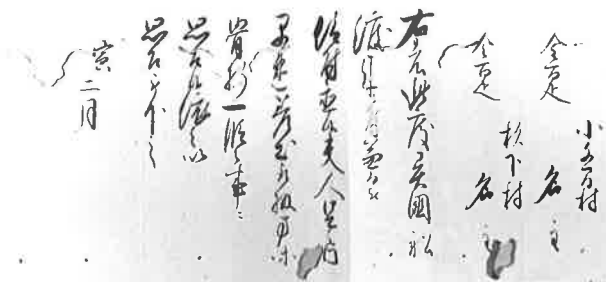
さてペリー艦隊の来航に接し、幕府は大名や旗本に対して、江戸湾の防備を命じました。小文間村と杉下村（つくばみらい市）に領地を有していた旗本の土岐氏は、非常時に際して人足30人を徴発することを命じました。嘉永6年7月、小文間村では人足として出る者20人と、人足賃などについての議定書を取り決めています。

翌安政元年（1854）1月、ペリーは前年の約束通り国書の返事を受け取るため、再度来航しました。土岐氏は、小文間村と杉下村から人足30人を徴発しました。しかし2月になると農繁期に入るため、ペリーはまだ帰国しませんでした。人足をいったん村に帰しています。そして土岐氏は、金10両を手当金として両村に貸し付けています。返済は10か年賦で、毎年金1両を村から旗本に返済することになりました。これとは別に、小文間村と杉下村の名主には、人足の差出方に尽力したので金100疋が渡されています。

さて幕府は、安政元年3月に日米和親条約を結びます。和親条約の規定により、安政3年7月にアメリカ総領事ハリスが着任し、通商条約締結に向けての交渉が始まります。安政5年6月、日米修好通商条約が調印され、次いでオランダ・ロシア・イギリス・フランスとも通商条約が結ばれ、貿易がはじまります。この5か国と結んだ条約の写しは、取手の村にも伝えられています。取手の人びとも、好むと好まざるとにかかわらず、時代の大きな流れの中に巻き込まれて行くことになるのでした。



(安政元年)2月 ペリー来航につき人足手当金拝借達し(木村廉家文書)



(安政元年)2月 ペリー来航人足勤め方につき手当金下付達し(木村廉家文書)



安政の五か国条約の写し (岡田慎太郎家文書)  
安政5年に結ばれた条約の写しが、取手の村にも伝えられました。



## 2. 軍制改革と兵賦の徴発

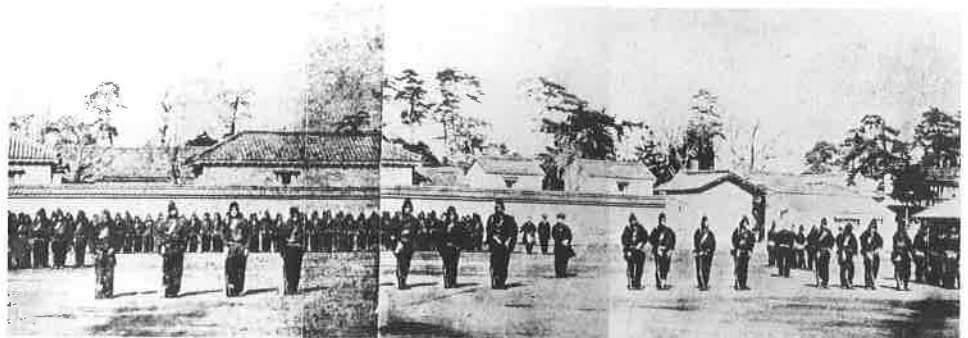
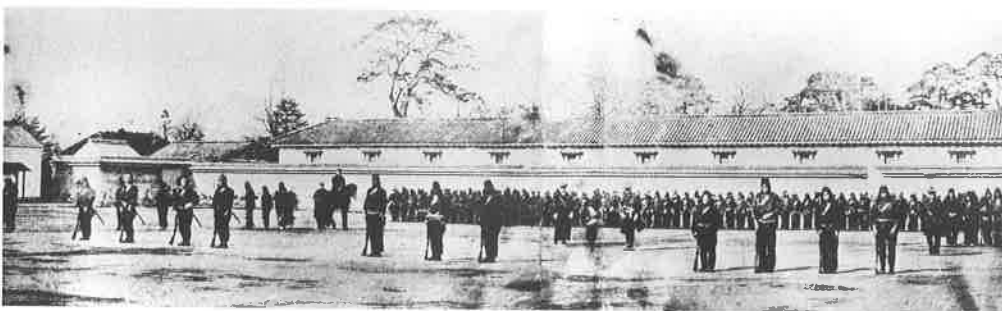
黒船に象徴される欧米列強諸国の圧倒的な軍事力を目の当たりにした幕府は、近代化に向けた改革に取り組みます。その一つとして文久元年（1861）、幕府は近代的陸軍の創設に着手し、翌文久2年には、歩兵・砲兵・騎兵の三兵からなる洋式装備の陸軍が編制されることになりました。その際、騎兵と士官層は旗本・御家人から選出されましたが、多数の人員が必要となる歩兵をどうするかが問題となりました。そこで幕府は、文久2年12月、領地を有している旗本に対して、領地の農民を兵賦として徴発することを命じます。

上高井村・酒詰村・百井戸村に領地を有していた旗本の間部氏は、領地の村むらに、兵賦2人を出すことを命じます。当時の間部氏の領地は、伊豆国に3か村、三河国に2か村、下総国に5か村あり、領地高は2082石余でした。村むらでは、兵賦を金納で済ませたいと間部氏に嘆願しますが聞き届けられず、下総国の領地5か村から兵賦2人を差し出すよう厳命されます。5か村でのくじ引きの結果、上高井村と酒詰村の農民2人が兵賦となることになりました。文久3年2月には、2人は村役人に付き添われ江戸に出立し間部氏の屋敷に詰め、7月には小川町の歩兵屯所に引き渡されました。2人とも年齢は40歳を超えていて、はたして陸軍歩兵の訓練に耐えられるのか、はなはだ心もとない感じがします。また給金は年額で、1人につき間部氏から金10両、領地の村むらから金13両の、合計金23両が支給されました。幕府は兵賦の給金の上限を金10両と定めていましたが、実際はこれを上回る給金が支払われていたことがわかります。村むらが支払う給金26両（2人分）は、まず下総国の5か村が出金し、翌年に10か村で清算することになりました。

このように幕府の近代的陸軍創設の事業は、村むらの農民に兵賦という、これまでは全く考えられなかったような新たな負担を課したのでした。



文久3年2月 兵賦人忠吉給金渡方控帳(故野口多蔵家文書) 上高井村から出た兵賦への給金の支払いの控えです。



大坂城内で幕府陸軍歩兵が訓練する光景(昭和6年10月刊『幕末明治文化変遷史』茨城県立図書館所蔵)

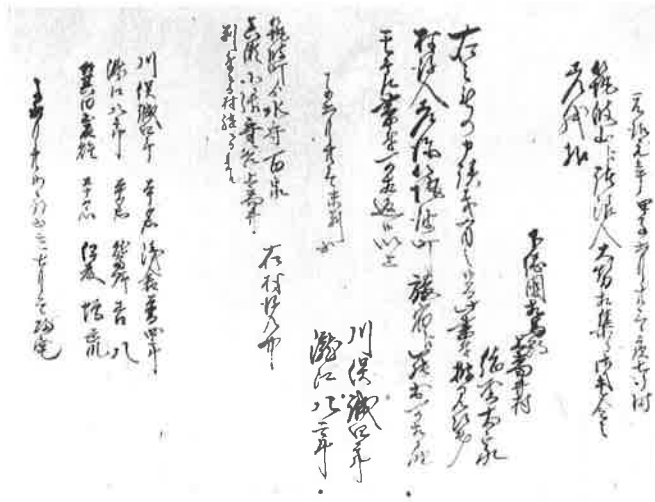
### 3. 天狗党の騒乱

幕末の水戸藩では、尊王攘夷を唱える天狗党と、保守的な門閥譜代層の諸生党による藩内抗争が激化しました。元治元年(1864)3月、藤田小四郎、田村稻之衛門らに率いられた天狗党は、攘夷を唱えて筑波山に挙兵しました。

筑波山に挙兵した天狗党は、近隣の村むらから軍資金や兵糧などを強制的に徴発しました。取手宿では、6月に筑波山から来た井出藤太郎から金300両を要求され、その場で金100両を渡し、7月に金800両を筑波山に持参しています。ただし金100両は街道の通行増による難渋を訴えたところ減額され、金700両を納めています。他にも市内の村むらでは、5月から7月にかけて、金銭・刀・槍・脇差・馬具・白木綿・玄米が徴発されています。これらは、表面的には自発的な献金・献納の形をとっていますが、実際は武力を背景とした強制的徴発に他なりませんでした。人びとの天狗党を見る目は、尊王攘夷の志士から、無頼の悪徒も同然へと変わっていったのです。

元治元年6月、幕府は筑波山に挙兵した天狗党の討伐を諸藩に命じるとともに、創設まもない洋式装備の陸軍歩兵を投入しました。天狗党勢は、筑波山を出て水戸に向かいましたが、諸生党勢に阻まれ水戸城下に入れず、那珂湊に集結します。10月、那珂湊で天狗党勢と幕府軍・諸生党勢は大激戦を繰り広げ、ここに天狗党勢は敗北しました。

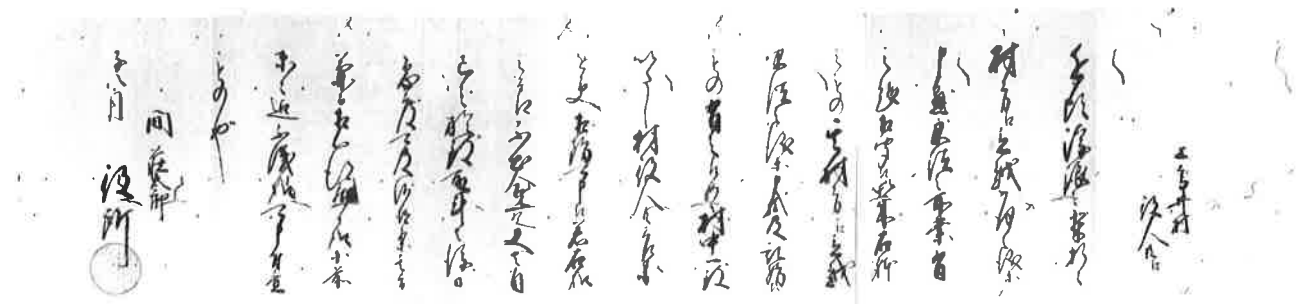
この那珂湊の戦いの時、上高井村から出た兵賦が戦死しています。ただし、文久3年に兵賦となった者ではありませんでした。経緯は判然としませんが、ある時点で交替しているようで、戦死者は上高井村の農民ではありませんでした。また酒詰村から出た兵賦も、交替していました。幕府は、旗本領の農民を兵賦として徴発する計画でしたが、実際には江戸にいたその日暮しの細民がかなりの割合を占めたようです。間部氏領の兵賦の給金は、この後すぐに一年につき金28両に増額されています。兵賦となり幕府陸軍の歩兵に編制されることは、まさに自己の生命を危険にさらすことだったのです。これが村むらにとって、大きな衝撃となったに違いありません。



(元治元年)6月23日 上高井村の農民を筑波山に呼び寄せる天狗党の差紙(故野口多蔵家文書) 差紙を受け取った農民にとって拒絶することは不可能で、筑波山に行くしかありませんでした。



元治元年11月3日 上高井村から出た兵賦の代人が、那珂湊で戦死したことを伝える書状(故野口多蔵家文書)



(元治元年)8月 浮浪の輩取締につき上高井村役人宛間部莊太郎申付け(故野口多蔵家文書) 村へ来て不法行為や乱暴をはたらく浮浪の輩には、村役人の下に一致団結して対処するようにと達しています。

#### 4. 幕府の倒壊と戊辰戦争

慶応4年（1868）1月3日、京都南郊の鳥羽伏見で、旧幕府軍と薩摩藩・長州藩を主力とする新政府軍が戦鬪を交えました。これが、翌明治2年（1869）5月の箱館五稜郭の開城まで続く、戊辰戦争の始まりです。さて緒戦で劣勢に追い込まれた旧幕府軍は、戦況を立て直すことができず、徳川慶喜はひそかに大坂城を脱出し、軍艦で江戸にもどりました。慶喜は新政府に対し恭順の意思を表し、2月には上野寛永寺の大慈院に入り謹慎します。4月11日、江戸城が開城され、新政府軍が江戸城に入りました。そしてこの日の早朝、徳川慶喜は寛永寺大慈院を出て、新たな謹慎先と定められた水戸に向かって出発します。

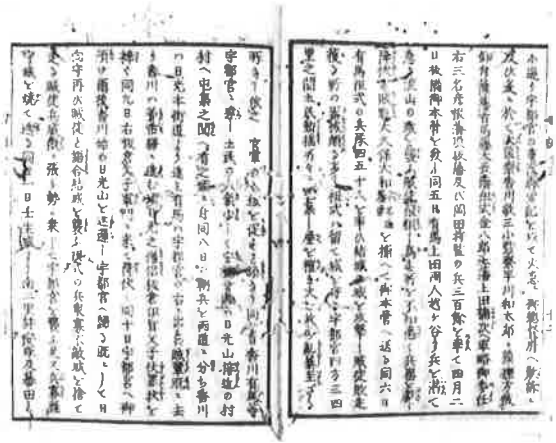
しかし江戸開城を前後して、これに不満をいだく旧幕府の人びとは江戸を離れ、新政府軍と一戦を交えようと各地に散っていきます。このような隊のひとつに忠義隊がありました。忠義隊は、平賀村（松戸市）の本土寺に屯集して、4月15日に取手宿に使者を送り、軍資金と兵糧米の供出を強要しました。取手宿は隣村の大鹿村とともに、金50両と玄米25俵の代金36両余の計86両余を供出しました。

またこれより先の4月2日、近藤勇・土方歳三に率いられた新選組が流山に入ります。流山に旧幕府の部隊が入ったことを察知した新政府軍は、翌3日流山を囲み近藤を捕らえます。土方は江戸へ出て近藤の救出に奔走しますが、かないませんでした。土方は、市川国府台（市川市）に集結した大鳥圭介軍に加わり、先鋒軍の副隊長となり宇都宮・日光をめざします。その途中土方は布施（柏市）で利根川を渡り、戸頭を通過して守谷・水海道・石下・下妻・下館と進んでいったのです。

さらに7月以降は、東北方面に向かう新政府軍の通行が激しくなり、取手宿周辺では人馬の微発が続きました。このように、旧幕府軍や新政府軍の通行に伴う村むらの負担は、少なくありませんでした。



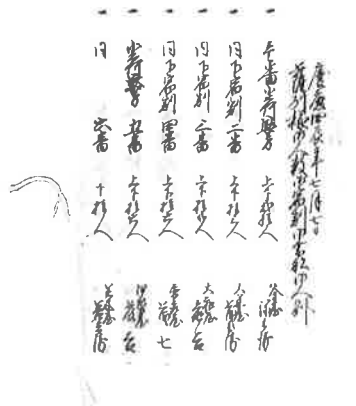
慶応4年4月16日 忠義隊献金受納につき覚（根本彰家文書）



慶応4年閏4月 太政官日誌第十三（染野修家文書）  
4月5日（3日の誤り）に、大久保大和（近藤勇の別名）が流山で捕らえられたことが、書かれています。



慶応4年7月6日  
芸州様御人数御宿割御船割御人別  
（染野修家文書）



慶応4年7月7日  
薩州様御人数御宿割御乗船御人別  
（染野修家文書）



新政府軍（長州藩）の関札（染野修家文書）  
各部隊が休憩する家の前に、貼り出しました。

芸州は広島藩、薩州は薩摩藩です。新政府軍は、取手に宿泊した後、利根川を船で銚子に向かい、ここからさらに東北方面に向かいました。

## 5. 県の成立

慶応4年（1868）閏4月21日に出された「政体書」では、地方統治の機関として府・藩・県が置かれることになりました。しかしこの時点での関東各国では、いまだ新政府の統治は浸透していませんでした。関東各国の旧幕府領と元旗本領に、知県事という新政府最初の地方官が任命されるのは、6月に入ってからでした。

慶応4年6月27日、江戸鎮台府は粥川光明（三上藩士）を常陸知県事に任命しました。市内では、久賀地区の根新田が常陸知県事の管轄となっています。8月8日には、佐々布直武（肥後藩士）が、民政局から下総知県事に任命されています。市内の30か村が下総知県事の管轄となっています。翌明治2年（1869）1月13日、下総知県事の管轄地には県名がつけられ、葛飾県が成立しました（県庁は流山）。初代の権知事には、2代目下総知県事の水筑龍（佐伯藩士）がなっています。2月9日には、常陸知県事の管轄地に若森県が設置されます（県庁はつくば市）。初代権知事には、2代目常陸知県事の池田種徳（広島藩士）が就任しています。

明治4年7月14日に廃藩置県が行われると、現在の茨城県内には葛飾県・若森県に加えて18の県が成立しました。次いで11月13日には、改置府県と呼ばれる大規模な府県の統廃合が断行されました。この日、県内では水戸を県庁とする茨城県と、土浦を県庁とする新治県が設置されました。市内久賀地区の村むらは、新治県となっています。初代の新治県権令には、2代目若森県権知事の池田が就任しています。また小貝川以西・以南の旧下総国の村むらは、印旛県となっています（県庁は流山）。この時、久賀地区を除く市内のすべての村むらは、印旛県となりました。明治6年6月15日、印旛県と木更津県が合併して千葉県が成立しました。印旛県であった市内の村むらは、千葉県となったのです。明治8年5月7日、新治県は廃止され、管轄地は茨城・千葉両県に引き渡されます。また利根川がほぼ両県の県境となり、ここに市内の村むらはすべて茨城県となり、現在に至っているのです。

七月  
太政官  
宣下候事  
右  
権知事  
任若森縣  
池田徳郎

（明治2年）7月 池田種徳若森県権知事辞令（池田稔家文書）  
若森県の設置は明治2年2月9日ですが、権知事の辞令は7月付けになっています。

上農  
禁言  
義藏

上農札（故野口多藏家文書）  
葛飾県は、明治2年12月に義倉制度を創設しますが、義倉に金穀を抛出した農民を上農としました。

印鑑  
刑  
法  
方  
租  
税  
方  
會  
計  
方  
庶  
務  
方

葛飾県各種印鑑（梁野修家文書）

印文は、右から「葛飾県庁」、「葛飾県金穀出納印章」、「葛飾県刑政局」です。





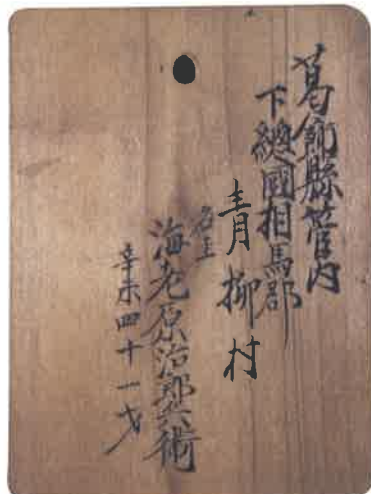
幕府陸軍歩兵調練図（所蔵、写真提供 松戸市戸定歴史館、写真パネルで展示します）  
すでに江戸時代の段階で、洋服に洋式銃を装備した近代的陸軍が編制されていたのです。騎兵や歩兵の帽子は、フランスインドシナ（現在のベトナム）駐留軍の軍装にならったものです。



天狗党追討に出陣した幕府陸軍歩兵（如意輪寺所蔵、写真提供 群馬県立歴史博物館、写真パネルで展示します）  
笠間市にある如意輪寺の門前に、幕府陸軍の歩兵部隊が駐屯しました。



明治4年6月 葛飾県旅行鑑札（染野修家文書）

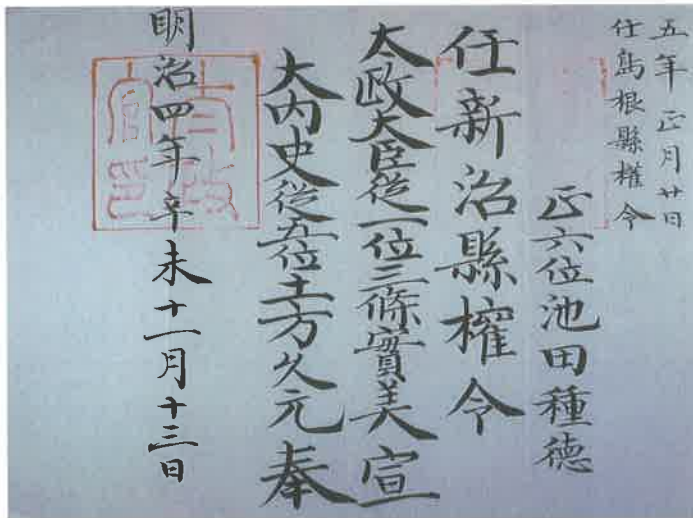


明治2年4月 葛飾県鉄砲鑑札（木村廉家文書）





京都三条河原にさらされた足利三代將軍(尊氏・義詮・義満)の木像の首(東京大学史料編纂所蔵「風説集」、写真提供 中央公論新社、写真パネルで展示します)



明治4年11月13日 池田種徳新治県権令辞令(池田稔家文書)



さきかげつが  
現在の魁塚  
この碑は明治3年に、相楽らの同志であった落合直亮や丸山徳五郎らによって建立されました。



魁塚の図(渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館)  
大正元年12月、初めて下諏訪を訪ねて魁塚に詣でた相楽総三の孫木村亀太郎は、祖父の冤罪を晴らすことを決意します。

## II. 幕末・明治維新を駆け抜けた人びと

### 1. 宮和田光胤・胤影

文久3年（1863）2月23日の朝、京都等持院に安置されていた足利三代将軍（尊氏・義詮・義満）の木像の首が、三条河原にさらされる事件が起きます。京都守護職の会津藩主松平容保は激怒して、犯人の逮捕を厳命します。

首謀者は意外に早く、2月26日の夜に潜伏場所を急襲されて捕らえられます。首謀者の一人に、宮和田村出身の宮和田勇太郎胤影がいました。宮和田家は、宮和田村の草分けで、代々名主や本陣を勤める豪農でした。勇太郎の父宮和田又左衛門光胤は、文化13年（1816）に生まれ、剣を千葉周作に学び北辰一刀流の免許皆伝を受け、また平田派国学の門人として名が知られていました。

足利将軍木像梟首事件にかかわった人びとは、出身地も身分もさまざまでしたが、皆平田派国学の門人でした。天保10年（1839）に生まれた勇太郎も、剣を千葉周作に学ぶとともに平田国学を学びました。当時の平田家の当主は鉄胤で、秋田藩に召し抱えられていました。そして秋田藩主佐竹義堯が、一橋慶喜とともに上京するのに従いました。鉄胤の入京に伴い、門人たちが京都に入る者が相次ぎ、京都はさながら平田派国学者結集の場となりました。

さて松平容保は犯人を厳罰に処そうとしましたが、結局は身分に応じて入獄や大名家への御預けとなりました。伊勢国の菰野藩に預けられた勇太郎は、慶応3年（1867）12月に許されましたが、再び世に出た時は、すでに幕府は倒れ、新政府が成立していました。勇太郎は徳島藩士となり、東京府に出仕しましたが、明治10年（1877）に、39歳の若さで徳島で亡くなりました。又左衛門は、明治6年から東京深川富岡八幡宮の宮司となり、明治21年に73歳で亡くなっています。

この足利将軍木像梟首事件は、尊王攘夷運動が尊王倒幕運動に転換する画期となったと言われています。



明治17年5月  
千葉姓名宮和田履歴之前文  
(宮和田保家文書)

宮和田光胤一代記之内  
下(宮和田保家文書)

宮和田光胤一代記之内 下(宮和田保家文書)  
宮和田勇太郎胤影が会津藩に捕らえられたことを、父の又左衛門光胤が知る場面が書かれています。

### 2. 池田種徳

池田徳太郎種徳は、天保2年（1831）に広島県忠海町の医師の家に生まれました。幼少から学問を好み、安政元年（1854）には江戸に出て昌平黌に学び、同4年には麹町に塾を開き、お玉が池の清河八郎の道場に通い剣を学びます。清河は、天保元年に庄内藩の郷士の家に生まれ、江戸に出て千葉周作に剣を学びました。共に尊王攘夷の思想を持ち、両者は親しくなっていくと考えられます。文久元年（1867）、清河が、尊王攘夷の志士の取り締まりのために尾行していた幕府の捕吏の手先らしい者を切ったことにかかわり、池田は捕らえられ獄につながれます。

文久2年、幕府は尊王攘夷を唱える浪士たちを懐柔し、幕府側に引き付けるため、浪士組の結成をはかります。浪士組に

応募した者は前科が赦されることとなり、清河も罪を赦され浪士組の首班として参加します。投獄されていた池田も赦され、浪士組に加わります。浪士組は、文久3年に上洛した14代将軍徳川家茂の身辺警護のため、京に上ります。

しかし京に着いた清河は、浪士組は将軍と共に江戸に帰り、関東の地で攘夷を執行することを主張します。ここで池田は清河とは袂を分かち、以後は広島藩の尊王攘夷の志士として活躍します。また清河と共に江戸に戻らず、京に留まった芹沢鴨・近藤勇・土方歳三・沖田総司らが、後の新選組となります。

戊辰戦争が始まると、慶応4年（1868）7月、池田は徴士軍務権判事となり、東北遊撃軍将副参謀として東北方面に出陣します。またこの時に、有栖川宮家から甲直垂と烏帽子を拝領しています。東京に凱旋後の、明治元年（1868）12月に2代目常陸知県事となり、明治2年2月9日に若森県が設置されると初代の若森県権知事になりました。明治4年11月13日に新治県が新設されると、初代新治県権令に就任しますが、約2か月後の翌明治5年1月20日には、島根県権令に転任します。明治7年9月18日に、44歳で亡くなりました。

七月  
徴士軍務  
権判事被  
仰付候事  
池田徳太郎

(慶応4年)7月 池田徳太郎種徳徴士軍務権判事辞令(池田稔家文書)

池田徳太郎  
當官より東北遊  
撃軍将副参  
謀被  
仰付候事  
七月

(慶応4年)7月 池田徳太郎種徳東北遊撃軍将副参謀辞令(池田稔家文書)



有栖川宮  
執事  
池田徳太郎  
奉  
寄  
烏  
帽  
子  
一  
頂  
賜  
依  
之  
中  
直  
垂  
一  
疋  
奉  
出  
陣  
人  
般  
此  
征  
出  
陣

(慶応4年)7月 有栖川宮家よりの甲直垂・烏帽子下賜状(池田稔家文書)

池田徳太郎種徳(澤井常四郎『維新志士池田徳太郎』池田稔家文書より)  
東征大総督の有栖川宮熾仁親王から拝領の、甲直垂と烏帽子を着用しての写真です。

### 3. 相楽総三と渋谷総司

相楽総三は桐木新田の小島家の出身で、本名は小島四郎左衛門将満を名乗りました。当時の小島家は近隣にその名が聞こえた豪農で、江戸の赤坂に屋敷を有し、相楽もここで天保10年（1839）に生まれました。相楽は若い時から学問と武芸に励み、20歳の時にはすでに門人が100人以上いたそうです。おそらくは平田国学を学び、尊王の念を強くしていったものと思われまます。

文久元年（1861）、国学と兵学の塾を開じた相楽は、父の兵馬から金5000両を引き出して、東北へ旅をすると言い残して出立しました。そして、秋田から信濃・上野・下野方面の尊王攘夷の志士たちと交流し、その統合をはかったようです。

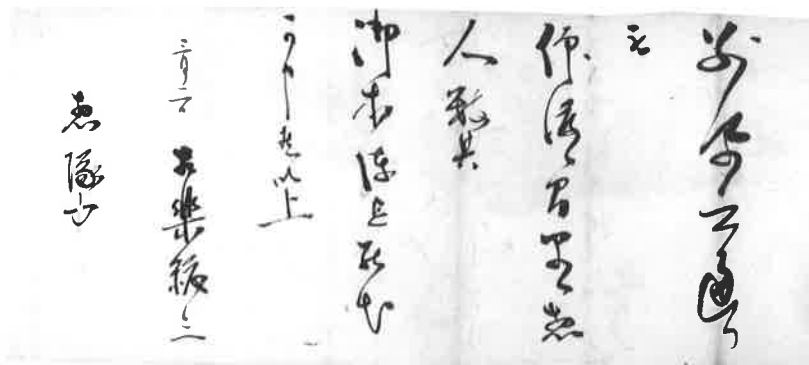


文久3年11月、尊王攘夷の志士たちによる慷慨組の赤城山挙兵が起きますが、相楽は同志の結合や軍資金の供与などに、深くかかわっていたと考えられています。慷慨組の赤城山挙兵はすぐに鎮圧されますが、先に見た翌元治元年（1864）の天狗党の筑波山挙兵にも呼応して、相楽は筑波山に上り天狗党と行動を共にしようとしていました。しかし天狗党の尊王攘夷運動が、水戸藩の内部抗争へとすり替わることに不満を感じ、袂を分かちます。

このように相楽が尊王攘夷の志士として活躍する姿に不安を感じた父の兵馬は、相楽と松江藩士の娘渡辺照を結婚させます。翌慶応元年（1865）、男の子が生まれますが、この子が相楽の一粒種となった河次郎です。結婚後も相楽の活動は止まず、慶応2年には京都に出て、上方で尊王攘夷の志士たちと交流します。京都で書いた「華夷弁」という論文が長州藩主毛利敬親の目にとり、<sup>たかちか</sup> 跋文が与えられたことから、相楽は一躍有名になりました。また薩摩藩の西郷隆盛・大久保利通、土佐藩の板垣退助と、親しく交わるようになりました。こうして慶応3年、相楽は武力倒幕派の江戸かく乱作戦に従事するため、江戸に向かいます。江戸にもどった相楽は、薩摩藩邸を拠点に浪士隊を結成します。この時に浪士隊に加わったのが、下総国葛飾郡佐津間村（鎌ヶ谷市）の名主家出身の渋谷総司でした。

ここで相楽は、下野国の出流山挙兵、甲府城攻略、相模国山中藩の荻野陣屋襲撃を画策します。出流山挙兵は幕府により鎮圧され、甲府城攻略も失敗しますが、荻野陣屋襲撃は成功します。また幕府の御用商人や、外国貿易で利益を上げている商人から軍資金を取り立てるなど、江戸の治安悪化工作を行ないます。ついに慶応3年12月25日、幕府は薩摩藩邸を攻撃、相楽らは藩邸を脱出して薩摩藩の軍艦で京都に向かいます。

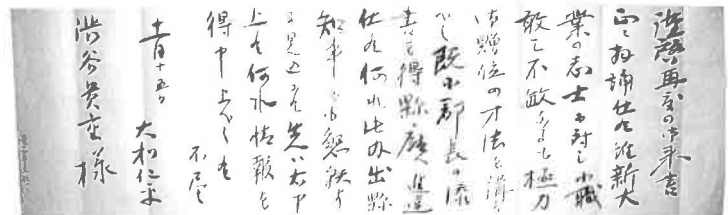
この薩摩藩邸攻撃事件が、慶応3年12月9日の王政復古の大号令の後、京都二条城を出て大坂城に退去していた15代将軍徳川慶喜をはじめとする旧幕府側に伝わると、翌慶応4年1月、旧幕府軍は「討薩表」をかかげて京都に進みます。1月3日、京都南郊の鳥羽・伏見で旧幕府軍と新政府軍が衝突し、ここに武力倒幕派は目的を達したのです。相楽は、その第一の功労者となったのです。



(慶応4年)3月2日 相楽総三絶筆書状(諏訪教育会所蔵、写真提供 下諏訪町立諏訪湖博物館、写真パネルで展示します) 3月1日に捕らえられた総三が、赤報隊の隊士たちに下諏訪宿本陣まで出頭するように伝えています。総三は、弁明の機会が与えられれば嫌疑は晴らせると確信していたようですが、その機会を得ないまま翌3日に処刑されてしまいます。



相楽総三遺族写真(所蔵、写真提供 下諏訪町立諏訪湖博物館) 右から総三の父の小島兵馬、子の木村河次郎、姪の彦坂てい子、姉の木村はま子です。明治6年頃に撮影されたものを、大正6年に複写したものです。

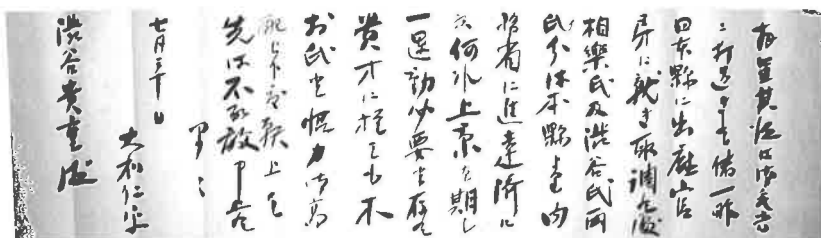


(大正14年)11月15日 渋谷貫重宛下諏訪町長大和仁平書簡(渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館) 維新大業の志士に対し、極力贈位の方法を講ずることを伝えています。

木村亀太郎と魁塚(所蔵、写真提供 下諏訪町立諏訪湖博物館) 大正5年4月3日の撮影です。

京都に入った相楽は、西郷からの指示で赤報隊を結成し、年貢半減を布告しながら東山道を江戸に向けて進軍します。しかし新政府は財政難から年貢半減を撤回し、赤報隊を偽官軍として闇に葬ろうとします。相楽は新政府や東山道軍に対して、自己の正当性と身の潔白を主張し交渉します。しかし3月1日、下諏訪で捕らえられ、弁明の機会もないまま、3月3日、赤報隊の同志7人とともに斬首されてしまいます。渋谷総司も、この時処刑されました。

相楽の死を知った妻の照は自害し、子の河次郎は総三の姉の木村はま子が引き取ります。河次郎の子の木村亀太郎は、祖父の冤罪を晴らすべく窮乏の中で資料の収集と運動を続けます。渋谷総司の子孫の渋谷貴重や、下諏訪町の人びとをはじめ、心ある多くの人びとに支えられ、ついに昭和3年（1928）の昭和天皇の即位の御大典にあたり、相楽に正五位、渋谷に従五位が贈位されました。他にも、赤報隊の関係者10名が贈位されました。翌昭和4年4月には、総三と渋谷は靖国神社に合祀され、ここに赤報隊の偽官軍の汚名は晴らされたのです。慶応4年の相楽らの処刑から、実に60年の歳月が流れていました。



(昭和3年)7月30日 渋谷貴重宛下諏訪町長大和仁平書簡  
(渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館)  
相楽総三と渋谷総司の贈位出願は、長野県より行なう旨が書かれています。



昭和3年11月10日 渋谷総司日記  
(渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館)  
昭和天皇の即位の御大典の贈位で、渋谷は従五位、相楽は正五位となりました。

昭和4年4月3日 諏訪に於ける明治維新勤王志士 遺物展覧会出品目録  
(渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館)  
相楽、渋谷はじめ赤報隊の面々の贈位と名誉回復を記念して、この日下諏訪小学校を会場にして、展覧会が開催されました。



昭和32年4月刊 相楽塚の話  
(渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館)  
相楽らの90回忌にあたり、当時の下諏訪町立博物館が刊行しました。この本には、赤報隊関係の史料や、木村亀太郎・渋谷貴重の回想談などが収録されています。

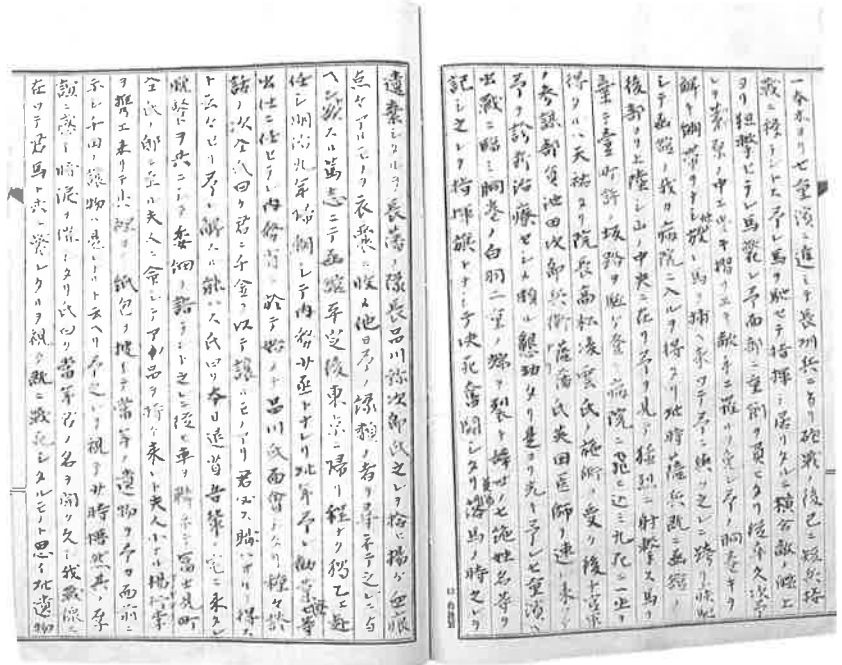
#### 4. 人見 寧

人見寧は、天保14年（1843）に京都で二条城詰鉄砲奉行組同心人見勝之丞の長男として生まれました。文久3年（1863）には上洛した14代將軍徳川家茂の御前で『孟子』を購読した後、撃剣上覧にも加わり、若くして文武両道に秀でた逸材であったことがうかがえます。慶応4年（1868）1月に発生した鳥羽伏見の戦いでは、旧幕府軍の一員として戦いました。江戸に戻った人見は、遊撃隊を率いて旧幕府海軍の榎本武揚のもとに身を寄せますが、同年4月には新政府軍への抗戦の意志を固めた下総国請西藩主林忠崇の下を訪れます。請西藩軍と遊撃隊は海を渡り相模国に上陸し、箱根や小田原で新政府軍と戦いましたが戦況は有利とならず、6月には海路小名浜（福島県いわき市）に渡り、この地で仙台藩や平藩などと共に新政府軍と戦います。そして江戸を脱走した榎本艦隊と再び合流して、9月には北海道へ渡りました。

翌明治2年（1869）、箱館五稜郭に立てこもり新政府軍に最後の戦いを挑みます。この時人見は、胴巻の白羽二重を切り七言絶句を書き、指揮旗としました。人見は額に重傷を負いますが一命はとりとめ、榎本の降伏後は東京で投獄生活を送り、許されて後福岡をへて静岡に移ります。明治9年3月、東京裁判所七等判事となり新政府に出仕しますが、すぐに内務卿大久保利通の勧めで内務省に移り殖産興業政策に邁進します。明治12年5月に茨城県大書記官、翌13年3月には県令に進み、以後5年4か月にわたって県政を担いました。この間、弘道館の公園化、養蚕の振興、利根運河の開削に先鞭をつけた事、教育の振興、徳川家大能牧場の再興、県内外からの人材の登用など多くの成果をあげました。県令退官後は利根運河会社社長、台湾樟脳会社設立発起人をはじめ多くの事業に関係し、実業界にも名を残しました。大正11年（1922）12月31日、東京麻布の自宅で81歳の波乱に富んだ生涯を閉じました。



箱館戦争時の人見勝太郎寧（人見寧則氏所蔵）



大正元年9月 人見寧履歴史書（人見寧則家文書） 明治9年に品川弥次郎の屋敷に招かれ、箱館戦争で使用した指揮旗の返却を受けたことが書かれている頁です。

## 5. 広瀬誠一郎

広瀬誠一郎は天保8年（1837）に、代々下高井村の名主を勤める家に生まれました。安政2年（1855）には19歳で名主見習役となり、万延元年（1860）に名主となっています。幕末・明治維新期の混乱した状況下において、青年名主としてよく村を治めました。特にこの時期の治安の悪化に対しては、土蔵から銃砲・刀・槍を取り出しこれを村民に貸し与えて、無宿無頼の徒の横行から村を守ったと伝えられています。

明治維新後は、取締役・勸農方・戸長・勸農方頭取（以上葛飾県）、戸長頭取・地券取調方（以上印旛県）、第14大区6小区戸長頭取・同育児取締兼務（以上千葉県）と、公的な役職を歴任しています。

葛飾県設置直後の明治2年（1869）5月には、治安の維持や助郷負担の公平化を求める建言書を、水筑権知事に提出しています。また明治6年には、前年に大蔵省から出された牧畜奨励の告諭を受け、牧牛事業に専念したいため戸長頭取を辞職したい旨を印旛県に出願し許されています。また明治13年には共成社という会社を興し製糸業に取り組み、殖産興業にも励みました。

明治11年には北相馬郡書記となり、翌12年に県会が開設されると、広瀬は北相馬郡選出の初代の県会議員に当選しました。明治15年には北相馬郡長に転じ、岡堰の改修を実現します。次いで同19年、北相馬郡長を辞職した広瀬は、利根川と



江戸川を短絡する利根運河の開削に、元茨城県令の人見寧やお雇い外国人（オランダ人）のムルデルとともに取り組みますが、竣工式直前の明治23年3月18日に、過労と心労から東京の旅宿で亡くなりました。

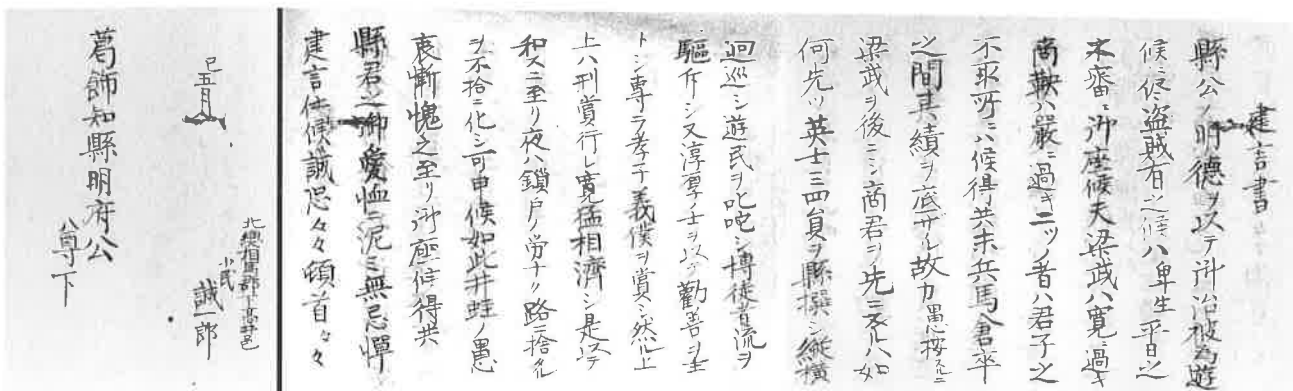
広瀬は生涯を通して、このように地方自治の先駆者として、また民権思想の普及者として、下高井村や周辺地域の発展と近代化に努めました。



広瀬誠一郎（中央、広瀬篤氏所蔵）  
ちょんまげを結び、刀を差したこの写真は、幕末か明治の初期に撮影されたものと考えられます。



明治16年の取手宿内の道普請（故渡辺博氏所蔵）  
北相馬郡長となった広瀬は、水戸街道の悪路の改修に努めました。この写真は、取手の町並みを撮影したものとしては、最古のものと考えられます。左側の道から一段高くなったところに、白い洋服を着て座っているのが、広瀬と伝えられています。



（明治2年）5月 葛飾県知事宛広瀬誠一郎建言書（広瀬篤家文書）  
治安の回復と維持を求める漢文調の建言書からは、新時代の息吹が感じられます。

### 主な参考文献

- 『取手市史』通史編Ⅱ・Ⅲ、近世史料編Ⅲ、近現代史料編Ⅰ、別巻本陣交通史料集Ⅱ、『藤代町史』通史編  
鎌ヶ谷市郷土資料館『慶応四年・明治元年の記憶 in 鎌ヶ谷』  
佐々木寛司『茨城の明治維新』、澤井常四郎『維新志士池田徳太郎』・『維新志士池田徳太郎補伝』、信濃教育会諏訪部会  
『相楽総三関係文書集』、高木俊輔『維新史の再発掘』、西澤朱実『相楽総三・赤報隊史料集』、高橋典幸・山田邦明・保  
谷徹・一ノ瀬俊也『日本軍事史』、西村文則『広瀬誠一郎伝』、野口武彦『幕末伝説』・『幕府歩兵隊』・『江戸は燃えているか』、芳賀登『偽官軍と明治維新政権』、長谷川伸『相楽総三とその同志』、宮地正人『歴史のなかの新選組』、宮和田保  
『宮和田光胤一代記』、森田美比『茨城県政と歴代知事』、山形紘『新撰組流山始末』・『東葛辰辰録』  
浅井昭治『足利將軍木像梟首事件』『共同研究 明治維新』、飯島章『明治維新时期直轄県の成立と展開』『千葉史学』16号・  
「戊辰期下総国の支配体制について」『近世房総の社会と文化』・「文久の軍制改革と旗本知行所徴発兵賦」『千葉史学』  
28号、後『幕末維新論集3幕政改革』、宮地正人『幕末平田国学と政治情報』『日本の近世18近代国家への志向』・「新選  
組と平田国学」『国史学』195号



明治2年3月刊『将満遺草』(渋谷経重家文書)  
相楽総三の歌集で、これは昭和26年4月に復刻されたものです。



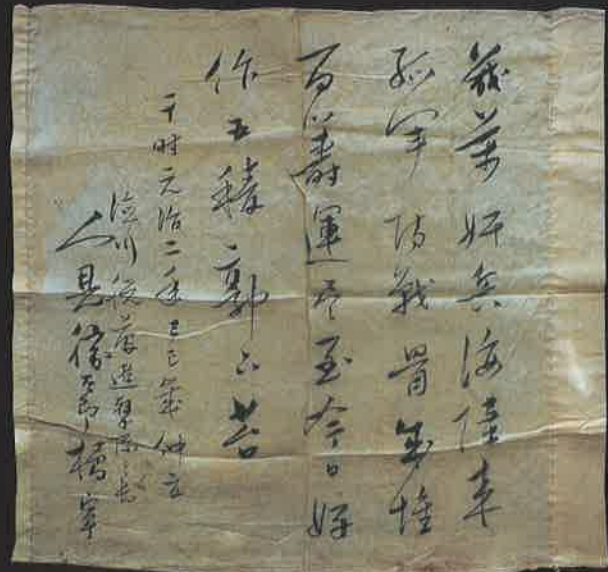
昭和14年11月刊『相楽総三関係文書集』  
(土浦市立図書館所蔵)信濃教育会諏訪部会によって編集されたこの文書集は、長く相楽総三研究の基本資料集として利用されてきました。



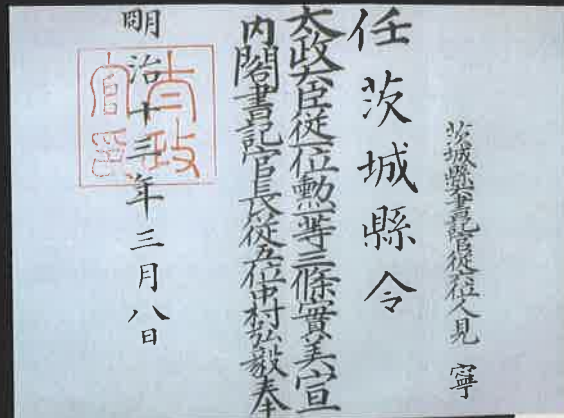
昭和18年5月刊『相楽総三とその同志』(個人蔵)  
著者の長谷川伸は、この作品を「紙の記念碑」、「筆の香華」と呼びました。



相楽総三和歌短冊復刻 (渋谷経重家文書)



人見寧が箱館戦争で使用した血染めの指揮旗(人見寧則氏所蔵)  
「幾万の奸兵海陸より来る 孤軍防戦し骨は堆と成る 百寿の運は尽きて今日に至る 好んで五稜郭の下の苔となる」の七言絶句が書かれています。この指揮旗は長州藩の品川次郎が拾い、明治9年に人見に返却されました。



明治13年3月8日 人見寧茨城県令辞令(人見寧則家文書)